



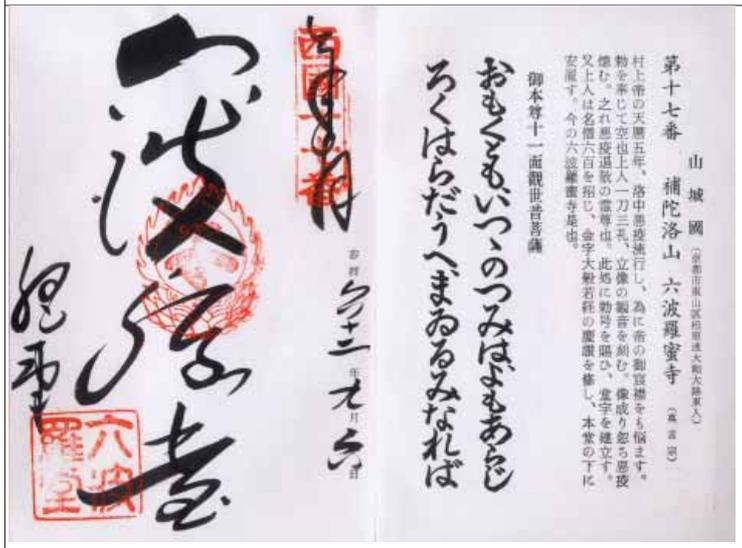
# 西国三十三霊場巡りマラニック 第十七番 新補陀洛山 六波羅蜜寺

フル百回楽走会  
**593**  
武藤 翔峰

二十五年九月九日

ここはすでに参拝したお寺だが、孫息子の強い希望で再度参拝することになった。宗派は真言宗智山派、本尊は十一面観世音菩薩。開基は空也上人である。醍醐天皇の第二皇子光勝空也上人は、当時京都で流行していた悪病を退散させるため、十一面観世音菩薩を刻み、天曆5年(951年)に堂を建て、この観音像を祀ったとされ、これがこの寺の創始と伝えられている。応和3年(963年)には当時の名僧600人を請じ、諸堂の落慶供養を盛大に営んだという。六波羅蜜寺は町の中にあり、一般の民家が寺の近くまで迫っており、車の往来する道路も寺に近接している。従って、寺の規模も小さく、ここには普通よく見られるような山門もない。本堂の裏手にある宝物館には、「空也上人立像」「平清盛坐像」など重要文化財に指定されている多数の仏像や文化財が所蔵されている。これらは日本史の教科書に記載されており、子供たちの関心も高いようだ。

この後、円山公園、八坂神社で昼食を食べ、19番行願寺、18番頂法寺と走り、参拝した。



# 西国三十三霊場巡りマラニック 第十九番 霊ゆう山 行願寺(革堂)

フル百回楽走会  
**593**  
武藤 翔峰

二十年三月九日

宗派は天台宗、本尊は千手観世音菩薩、開基は行円上人である。出家前の行円は獵師であったが、射止めた牝鹿の腹の中にいた子鹿が生きているのを見て改心し、仏門に入ったと言われている。行円が比叡山の横川で修行したとされており、皮聖と呼ばれていたようであるが、これは自分が射止めた牝鹿の皮に経文を書き、それを寒暑に関係なく身につけていたことに由来しているといわれている。行円が寛弘元年(1004年)に一乗小川に堂を建てたのが行願寺の創始と伝えられているが、行願寺という正式名称よりも革堂とという名称の方が一般にはよく知られているのも、行円が鹿皮を身につけていたことによるといわれている。革堂は市街地の中にある寺で、それだけに境内は狭く建造物が建て込んでいる。行願寺は何回かの火災にあったようで、現在の場所に移ってきたのは、宝永5年(1708年)の大火の後とされている。この後、近くの18番頂法寺へ向かった。京都市役所まへの広場では「よさこいソーラン」が披露されていた。

